

心の底の青石

丙「あなた方は何か聞きたいのですか。」

甲「先生、私は今日はどうしても聞かせていただきたいと思つてまいりました。私はどうしても安心ができないのです。私はだいぶ前から本気で聞かしていただくのですが、どうしても聞いてくれないのです。一昨年でしたか、先生が△△にお出でになった時も、今日こそと思つてまいりましたが、『頭が高い高い』とおっしゃるだけで何も教えてくさいません。それについても長い間考えてみましたが、やはり私の頭が高かつたのです。」

丙「それで今のあなたはどのようなのですか。」

甲「聞け聞けと聞かされますから、聞いて安心しようとすればするだけ、み教えが偽りとは思いませんのに、どうしても私の心の底には、聞いてくれないものがあるのでございます。何ゆえに素直に聞いてくれないのでしょうか。聞いて安心しようとすればするだけ聞いてくれないのです。どうかお育てをお願いします。」

丙「なるほど……そしてあなたはどのようなのですか。」

乙「私は今日もう先生はお帰りになつたかも知れんと思いましたが、ほつておけないので、××から来ましたが、先生いつたいどうなのでしょう、み教えを聞けば聞くだけ、私の心の底には、細工にならない、硬い硬い青石のようなものがあるのです。これではいけないと思つていよいよ聞きます。聞かしていただければいいだけ、この石が見えます。今ではまったく私の心いつぱいがこの青石でございます。いつたいどうしたのです。このとおり歳はとりますし、じつとしておられませんか。どうかお教えをお願いします。」

丙「お二人ともご熱心なご求道ぶりには頭がさがります。今日も遠方からよくお出でくださいました。だいぶ聞いたお方でないと、そんなものが見えてはきません。」

甲「私のも、青い石と言えば言われます。私の心もちつとも変わらないのですから。」
丙「聞いて変わつてくれたら、聞いたと言われるが、変わつてくれないのだから聞いてくれないのだと思うのでしょうか。それが間違いです。いつたいお二人のお心は同じことなのです。熱心に、しかも自分の心をゴマ化さずに求めつづけた人のみがそうしたものを見てくるのです。お二人とも二つの心がある気がするでしょう。」

甲乙「確かにそうです。二つの心に困っているのです。」
丙「だれでも初めは、自分の心を豆腐だと思つています。それで善になりきろうと思えば善になり、賢くなろうと思えば賢くなり、きることができると思つています。そこで、如来の本願、南無阿弥陀仏を聞きはじめますと、心の中に一つの願いがはつきりしてきます。ところが、はじめはどうしても、いわゆる定善の自力で、ある意味での、善人になろうとします。道徳的善人になろうとするのも、愚痴を厭う心になるのも、瞋恚の炎に焼かれている自分を見るのも、さらに根本的に無自覚に生きていることがたまたまなくなるのも、心の中に一つのものがはつきり動きはじめからであります。そうした心の動きの一切を、豆腐になりたい、豆腐になるのがいい

のだと思ふ心だとしておきます。豆腐になりたい！ 豆腐になりたい！ と願う心が深くなればなるだけ、硬い青石が見えてきます。青石が見えてくるからいよいよ豆腐になりたい。それを求めるからいよいよそれでないものが見える。こうした戦いに勝つことによつて、如来に救われるのだ。少くとも如来の本願は、豆腐になりきつた心の上に立てられるのだと考えます。」

乙「そうです。そのとおりの心でこの幾年かを困りつづけたのでございます。」

丙「そうでしょう。そうなるのがあたりまえです。しかれば豆腐になりきることができるか。」

甲「その望みはもうだめになりそうなのです。なつてくれないのです。」

乙「私の心の青石は、底がないのです。それにまだ豆腐になりたいのです。」

丙「そこです。そこをもう一步ぬけるのです。多くの求道者は、そこで、頭に描いた如来の慈悲を持つてきて、妥協してしまふのです。よくお聞きなさい。十九願および二十願の定散自力の機というのが、今出ている機なのです。豆腐になつて如来と結ばれようとするその心が。その心はいけない自力の我慢を通しきろうとする心であります。本願の生きる第十八願とはまったく反対の心であります。」

乙「もう私は豆腐にはなられません。」

丙「なりたい心はあるでしょう。」

乙「あるから苦しむのですが、もう豆腐にはなられません。私は硬い青石です。」

丙「いよいよならませんか。」

乙「まったくなられません。」

丙「なられたら如来の本願はいらぬのです。今こそ、あなたの自力は役立たないではありませんか。」

乙「もう自力では豆腐にはなられません。」

丙「他力で青石が豆腐になつて、そして豆腐が救われるのではないのです。青石が如来に救われるのです。悪人正機の本願です。救いは、豆腐の中にあるのでもなく、青石の中にあるのでもないのです。如来の本願、南無阿弥陀仏の中に、青石のままを救う力があるのです。豆腐にもならねず、青石をどうすることもできない、その全体が如来に救われるのです。」

甲「あ！ そうでしたか。」

乙「青石が豆腐にならずに救われるのですか。」

丙「聖人に聞きますと、『愚禿抄』の中にこんな意味のことを言っておられます。まず私どもが目覚めはじめます。生死の穢土を厭うて、浄土を欣求します。厭離穢土、欣求浄土というのがそれであります。しかしそれは豎出とて、自力で長い間かかる道であると言われます。つぎにそれができないとわかると、その反対に欣求浄土、厭離穢土の道、生死を厭わぬ凡夫にはまず浄土を欣求させて、そして生死をいとわすのである。確かにわれらはこの世界を通ります。浄土を求める心から生死をいとう心もおこさせられるのです。ですが、これは横出他力、すなわち他力でながい間かかる道、他力中の自力の道だとせられます。さらにわれについて深まつてきますと、浄土を求めもせず、生死煩惱を厭いもせぬ、まったくの青石を凝視するよう

になつてきます。まことにわれらの衷心は、さめればさめるだけ、さめてくれない、聞いてくれない、変わつてくれない私であることを知つて、ついに善導大師のいわゆる『われ今かえらばまた死せん。とどまらばまた死せん。ゆかばまた死せん。一種として死をまぬかれざれば……』という行きづまりを感じます。この時の機はまったく無厭欣の青石です。ここでも自力はついに滅んで如来大悲の大信海に直入するのです。」

乙「私は青石でよかつたのです。」

丙「そうです。でも自力心は自力をやつてやりきつて初めて棄てるのです。十九、二十願をふんだことこそ、如来の方便であります。」

甲「ではあの苦しかつた自力のままが他力のおんはからいであつたのですか。」

丙「今はどうです。何か如来からいただきたいですか、不安心がありますか。」

甲「何もありません。長い間聞かせよう聞かせようとしましたが、聞いて後たすけられるのではなかつたのです。助けられる真のみ心を聞きました。ありがとうございます。」

乙「豆腐になることさえいらなくなつて広い世界に出していただきました。ありがとうございます。うございしました。南無阿弥陀仏……。」